

平成 30 年度
学長戦略経費（重点分野研究プロジェクト）

特別な教育的ニーズに対応する人材育成のための

情報支援

—支援教材の作成と ICT を活用した情報提供—

事業成果報告書

北海道教育大学
特別支援教育プロジェクト
平成 31 年 3 月

はじめに

障害者基本法の改正（平成 23 年 8 月）や中教審の「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」（平成 24 年 7 月）にも見られるとおり、発達障害などの特別な教育的ニーズを持つ児童生徒への教育実践力の力量形成については、特別支援学校の教員を目指す学生ばかりではなく、通常学級の教員を目指す学生、特別支援学校教諭免許状を持たない、あるいは特別支援学校等に勤務経験のない教員に対しても強く求められている。

北海道は広大な地域にへき地・小規模校が多数存在する。とりわけ遠隔地の小規模校においては、学校の統廃合などにより孤立が進むとともに、貧困や養育困難を背景とする多様な教育的ニーズのある子どもへの対応が求められており、入学から卒業まではもちろんのこと、就労後の支援までを含めた総合的な「地域における発達支援」を見通した教育ができる人材の育成が喫緊の課題となっている。

発達障害に関する専門機関による支援については、遠距離であることから移動や情報のやりとりにおける双方の負担が大きく、対応が遅くなるなどの問題がある。一方、地域の特別支援教育の柱となるべき特別支援学級担当教員についてみると、これまでの調査から、北海道東部のへき地・小規模校の多い地域では、特別支援教育学校免許取得率が約 2 割と低く（札幌近郊の石狩支庁では約 8 割）、また教員経験 5 年未満の教員が担当する特別支援学級が約 7 割を占めるなど、地域格差とともに、その教育力の低さが大きな課題となっている。

北海道における、へき地校や遠隔地の学校に対する課題は、離島地域やへき地校を抱える他の自治体にも共通する課題でもある。本事業では、このような課題に対し、どのような人材を育成することが望まれるのかを模索するとともに、北海道教育大学と地域の機関が協働で支援方法の開発に取り組むことにより、地域学校教育のあり方を模索した。

平成 30 年度も引き続き、これまでに行った講義や講習会、視察などにおいて得られた知見をもとに、発達障害に関わる理解啓発のための情報収集と北海道各地で現職教員の研修プログラムなどを実施した。さらにこれらの講義や講習会で用いた資料については、北海道教育大学特別支援教育プロジェクト専用の情報配信サーバー（以下、「ほくとくネット」という）に掲載し広く情報の提供を行った。

I. 事業の概要

発達障害児を含め多様な教育的ニーズのある子どもを含めたインクルーシブ教育の実施に向けた環境整備が進められようとしている。特別支援教育の教員のみならず、通常学級における特別な教育的ニーズのある子どもやその保護者に対し、地域の特性に応じた教育的支援ができるような人材育成のための環境構築が求められている。これまで中期計画に基づき進められてきた本学のプロジェクト（H22-27年度）において、特別支援に関する情報提供のシステムを構築してきた。これらを利用し、通常学校ならびに特別支援学校の教員を育成するための支援方法と教材に関する情報提供の環境整備を進めるとともに、その効果に関する資料を収集する。

Ⅱ．実施内容

1．情報ネットワークを通じた情報提供のためのコンテンツ開発

(1)発達障害およびその近接にある子どもたちへの包括的心理・学習アセスメントの実施

発達障害、特に発達性読み書き障害のある子どもの包括的アセスメントを実施し、保護者および学校、医療機関へのフィードバックを実施した。主として医療現場と学校現場からの紹介により、各種包括アセスメントを実施し、同時に担当教員へのコンサルテーションも実施した。これらの取り組みは、アセスメント結果を評価するデータベース構築に関連するものである。

(2)特別支援教育のアセスメント結果を包括的に評価するためのデータベース構築

包括的な情報が付随する包括的アセスメントデータをデータベースに蓄積し、データベース構築のためのネット環境の整備と情報システムの構築を行っている。アセスメントデータは現時点で 52 件である。引き続き包括的アセスメントデータを継続して蓄積することで、適応行動の程度に及ぼす要因、学習到達度に及ぼす要因、対人関係に及ぼす要因などについても検討し、データベース構築を目指す。

(3)ほくとくネットの掲載情報の充実

特別支援教育に関する本学の情報発信サイト「ほくとくネット」の掲載の充実を図った。特にこれまで「発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業」として継続的に取り組んできた発達障害支援学習補助テキストと学習用ワークブックについて、全項目の音声付きファイルのアップロードを行なった。

(4)附属特別支援学校における実践的取り組み

本校中学部と群馬大学教育学部附属特別支援学校中学部との交流を、インターネットと通じたテレビ電話を通じて行った。地域の違う友達とのやりとりから、自分の住む地域について学習する機会となった。さらに、修学旅行で北海道を訪れた群馬の友達と直接交流を行い、コミュニケーション及び人間関係の構築に関する学びにつなげることができた。

(5) 釧路校フィールド研修の実践

特別支援学校教員免許の取得を考えている2年生の学生を対象に、附属特別支援学校において3泊4日のフィールド研修を行った。学生は、特別支援学校の授業を観察した後、附属職員と授業やその中で子どもたちのかかわりについてディスカッションを行ったり、自分たちの学びを発表し合ったりした。実践を通して研修を行う中で、特別支援学校で子どもたちに教育を行う魅力を実感する学生も多かった。また、附属特別支援学校の教員にとっても、自らの取り組みを学生に説明しながら、改めて自己の実践を振り返る機会となっていた。さらに、宿泊した附属特別支援学校から近い八雲養護学校の視察研修を行い、病弱教育を行う学校の実践についての研修も行った。(取り組み成果については、4. 教職大学院、学部、附属学校の教員養成における共同的取り組みにも記載)

(6) インクルーシブな身体活動支援を通じた支援情報の収集と情報提供

インクルーシブな身体活動プログラムを定期的（月一回）実施し、発達障害のある子どもの支援方法について情報収集を行うとともに、「ほくとくネット」等を通して情報提供を行った。さらに附属学校（ふじのめ学級と2018年5月に実施）や、地域の自治体（札幌市と2019年2月に実施）との共同企画として、地域の障害のある児童生徒と障害のない児童生徒、学生、教員等による活動を実施するとともに情報発信をおこなった。地域ニーズに応えるとともに、学生の実践力の向上、支援方法に関する情報提供などの成果につながった。なお活動については、国際学会（ヨーロッパ・アダプテッド身体活動学会：イギリス大会）にて報告を行い国際的な評価を受けた。なお活動には、道内外からの視察者（道内の教員、福祉支援者、弘前大学、道外附属学校の教員等）が訪れるなどの情報発信にもつながった。

(7) 発達障害児とその親を支援するプロジェクト「おひさまクラブ」の実施

地域の保育所・幼稚園、小学校、児童発達支援センター、及び医療機関と連携し、発達障害のある就学期の子どもとその親を支援するプロジェクト「おひさまクラブ」を実施した。プロジェクトでは、12組の年長児～小学校1年生の子どもとその保護者に対し、釧路校学部1～3年生39名が、1家族あたり、3～4人の学年縦割りからなる支援チームを作り、年間を通じて支援実践に取り組んだ。これにより、発達障害のある子どもとその家族を支援するために必要な、子どもの実態把握力、プログラム作成力の向上と、支援者としての意識や態度

形成を図った。学生へのアンケート調査の結果、学生の発達障害児とその家族への支援に関する効力感と意欲が有意な差をもって向上したことが確認された（詳細は別紙報告参照）。

2. 研修会の実施（主催）

- ・平成30年8月10日（金）、八雲町民センター大集会室にて、函館校の特別支援教育スタッフによる「道南地域における現職教員研修プログラム（発達障害児への理解と支援）」を実施しました。本研修プログラムは昨年度、熊石で開催した研修会に引き続き、平成30年度北海道教育大学学長戦略経費（重点分野研究プロジェクト）「特別な教育的ニーズに対応する人材育成のための情報支援－支援教材とICTを活用した情報提供－」の一環として実施した。当日は「発達障害児の理解（北村博幸教授）」「発達障害児への具体的支援（五十嵐靖夫教授）」「通常学級における合理的配慮に基づく発達支援（細谷一博准教授）」の3部構成で実施し、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の教員や行政職員まで、50名を超える参加者があった。
- ・上富良野町にて特別支援教育に関する研修会の講師（WISC検査結果の読み取りと学習指導場面での活用）を行なった（旭川校：片桐）。
- ・上川教育研修センターにて「幼小連携教育」の研修講座講師を行なった（旭川校：片桐）。
- ・旭川市教育研究会神居・神楽ブロック研修会でアセスメントの研修会講師を行った（旭川校：片桐）。
- ・平成30年度道北地区児童館連絡協議会にて児童厚生員研修会の講師を行った（旭川校：片桐）。
- ・美深町特別支援教育講演会にて講師を行なった（旭川校：萩原）。
- ・遠軽町立東小学校望の岡分校・遠軽町立遠軽中学校望の岡分校にて研修会講師を行なった（旭川校：萩原）。
- ・第61回北海道私立幼稚園教育研究大会にて講師を行なった（旭川校：萩原）。
- ・平成30年度臨床発達心理士会研修会北海道支部研修会にて講師を行った（旭川校：蔦森）。
- ・平成30年度旭児連研修会にて講師を行った（旭川校：蔦森）。
- ・平成30年度胆振教育局独自研修会にて講師を行った（旭川校：蔦森）。
- ・平成30年度旭川市子ども総合相談センター第6回研修事業にて講師（アセス

- メント研修～WISC-IV検査の実施）を行った（旭川校：蔦森）。
- ・子 labo：特別支援教育に関わる支援者（教師、作業療法士、言語聴覚療法士など）による事例検討会を主催、月 1 回（4～11 月までに 8 回実施済み）、延べ参加者約 90 名
 - ・特別支援学校の自立活動・体育の指導内容相談：特別支援学校に訪問し、自立活動・体育における運動内容、指導方法、教材、授業作りについての助言（4 回）作成資料を添付（資料 1）
 - ・通級指導教室の指導内容相談：まなびの教室、ことばの教室に訪問し、運動の苦手さ、教具の使い方、生活動作の指導方法についての助言（6 回）、作成資料を添付（資料 2）
 - ・特別支援学級の環境設定相談：特別支援学級に訪問し、授業中の座位姿勢、教具の使い方についての助言（1 回）、作成資料を添付（資料 3）
 - ・特別支援教育専攻 2 年次全員が参加する附属小中学校特別支援学級ふじのめ学級において 3 週間の実習を行うにあたり、通常の事前指導に加えて、実習生が 7 月の研究大会に参加した。事前指導の一環としてふじのめ学級が主催する研究大会に参加し、会場設営や授業の撮影などを行うことで、将来の勤務校において研究大会を開催するための重要な経験をする機会となった。研究大会の開催にあたり、大学教員から 2 名の教員（青山眞二・千賀愛）が研究協力者として参加し、助言者の小学校長や市教委らとともに授業開発や授業研究の助言を行った。
 - ・空知教育局における発達障害児の支援方法における情報提供を行った。
 - ・岩見沢市における発達障害児の支援方法における情報提供を行った。なお特別支援教育専門家チームにおいて、通常学校の教員への研修を端としているコーディネーターから、本プロジェクト「ほくとくネット」の研修用テキストおよびワークブックに関して「大変わかりやすく情報支援ツールとして効果的である」旨の意見が寄せられた。
 - ・平成 30 年 12 月 8 日（土）、北海道特別支援教育学会道北支部を主催として、北海道教育大学旭川校にて「就学前後をつなぐ支援ニーズの現状と課題」を実施。
 - ・2019 年度の研修プログラムは、熊石で実施
 - ・附属特別支援学校の公開研究協議会において、武富博文氏をお呼びし、新学習指導要領について講演をいただき、現在求められる附属特別支援学校の役割について校内で研修を実施。

- ・附属特別支援学校での2年生12名の臨床実習授業を2019/2月に実施し（釧路校）、特別支援教育の実習カリキュラム内容についての研究を行った。
- ・そのほか、本事業にかかわる理解啓発のための講習会を実施（研究成果の公表実績欄参照）

3. 研修会、学会および研究大会への参加・助言、情報提供

- ・東京学芸大学附属特別支援学校及び埼玉大学附属特別支援学校の視察を行い、2校の教育環境の状況や交流及び協働学習の実践、教育課程の編成について情報収集を行った。また、教育実習や教員の研修の状況についても意見交流を行い、特別支援教育における人材育成に関する各校の取組について学ぶ機会を得た。
- ・福岡教育大学附属小・中学校で行われた「国立大学法人附属学校・特別支援学級ネットワーク第4回」に参加した（8月3日）。北海道、京都、奈良、広島、福岡、宮崎の教育大附属特別支援学級の教員、計22名が参加し、各校の実践について発表交流を行った。福岡教育大教授の中山健先生より、「知的障害特別支援学級におけるiPadを活用した学習について」、授業づくりに関する情報提供を受けた。読み書きや算数に困難を抱える生徒に対して有効と思われるアプリの紹介と、それらを教育現場で用いたことの成果や、今後の課題について検討された。
- ・「附属学校が果たす役割に対する期待」に関するアンケート調査実施
附属小学校・ふじのめ学級合同開催による全道研究大会において、附属校が果たす役割に対する参加者の期待を調査するため、北海道教育大学附属学校への期待に関するアンケート調査を実施した。参加者に550部を配布し、62部を回収、回収率は11.2%であった。アンケートは「とてもそう思う」「ややそう思う」「どちらでもない」「あまり思わない」「まったくそう思わない」の5件法で回答を得た。附属小が期待される役割については、と「質の高い研究授業の展開」「新しい支援・指導の方法の開発」では「とてもそう思う」「ややそう思う」を合わせて9割を超えた。「附属校の役割」の項目では、「指導開発」「授業展開」「研修機能」に高い期待が見られた。「附属校を経験した（経験する）教員には、どのような変化があるか」とい

う項目に対しては、「勤務後に周囲からの期待が高まる」「教職能力全般における専門性が高まる」「大学との連携や共同研究を通し学びや気づきがある」に「とてもそう思う」「そう思う」の回答者が多かった。全体として、附属校に対する期待では、「研究授業の公開棟による地域の教員への研修機能」「質の高い研究授業の展開」への期待が高かった一方で、「附属校としての独自の教育実践の展開」や「附属校としての独自の教育実践の展開」には高い期待は見られなかった。附属校を経験した教員の変化については、他の教員からの支援・指導の助言を求められるようになり、周囲の期待も高まる一方で、保護者への対応力や子どもの特性に応じた指導という点では、あまり変化しないと考えられていた。附属小学校・ふじのめ学級が地域の教育において果たす役割に対する期待は大きく、また附属校を経験した後も授業づくりについて周囲から指導・助言を求められていることが分かった。質問用紙と結果の図表については別紙を参照

- ・広島大学附属東雲小学校特別支援学級における附属学校・特別支援学級ネットワーク研修会にて各特別支援学級の研究及び実践交流を実施した。
- ・日本特殊教育学会（名古屋）、LD学会等において、本プロジェクトの取り組みによる成果について報告が行われた。
- ・北海道特別支援教育学会にメンバーが集合し、プロジェクトの進行状況の確認を行った。さらに特別支援教育に携わる地域の専門家の連携などについて意見交換を行なった。
- ・平成29年度北海道教育大学附属旭川幼稚園教育研究大会に共同研究者として参加した（旭川校：萩原）。
- ・旭川少年鑑別所拡大研究会にて、アセスメントの研修会講師を行った（旭川校：萩原）。
- ・旭川家庭裁判所調査官研修にて、発達障害に関わる事例についての講師及び情報提供を行った（旭川校：萩原）。
- ・旭川明成高等学校職員研修にて、発達障害のある生徒の理解及び支援に関して研修会講師を行った（旭川校：萩原）。
- ・滝川市発達支援研修会にて、発達障害のある児童生徒の理解及び支援に関して研修会講師を行った（旭川校：萩原）。
- ・オホーツク地区特別支援教育研究大会にて、講演会講師を行った発達

- 障害のある生徒の理解及び支援に関して研修会講師を行った（旭川校：萩原）。
- ・旭川市教育研究会神居・神楽ブロック研修会でアセスメントの研修会講師を行った（旭川校：片桐）。
 - ・北空知特別支援教育研究会にて講演会講師を行なった（旭川校：片桐）。
 - ・留萌市教育委員会主催の特別支援教育フォーラムにて講演会講師を行なった（旭川校：片桐）。
 - ・旭川市子ども総合相談センター研修事業で、アセスメントに関する助言及び情報提供等を行った（旭川校：蔦森）。
 - ・旭川市教育研究会北部・西部ブロック研修会でアセスメントに関する助言及び情報提供等を行った（旭川校：蔦森）。
 - ・上川管内教育研究会中部地区研究大会で包括的評価のデータベースに基づき、LDに対するアセスメント等に関する情報提供を行った（旭川校：蔦森）。
 - ・東川町特別支援教育講演会で、包括的評価のデータベースに基づき、LDに対するアセスメント等に関する情報提供を行った（旭川校：蔦森）。
 - ・北海道美深高等養護学校夏季研修会において、包括的データベースに基づき、LDに対する学習の認知プロセスに関する情報提供を行った（旭川校：蔦森）。
 - ・横浜市の小中学校における特別支援教室及び通級指導教室の視察。平成30年1月18日～19日に横浜市立宮谷小学校の特別支援教室，横浜市立平沼小学校，横浜市立仏向小学校，横浜市立共進中学校の通級指導教室を訪れ，教室の運営や指導の実際について視察した（教職大学院：小野寺，函館校：五十嵐）
 - ・その資料の一部を平成29年度第2回渡島教育局管内特別支援連携協議会で配布し，横浜市の取組を紹介した。（函館校：五十嵐）
 - ・北海道心理・教育アセスメント研究会（青山，五十嵐，北村，小野寺）第1回「K A B C - II を知ろう」6/17（土）サテライト，46名
 - ・北海道心理・教育アセスメント研究会（青山，五十嵐，北村，小野寺）第2回「L D ・ A D H D 等の心理的疑似体験プログラム」9/2（土）旭川，30名
 - ・北海道心理・教育アセスメント研究会（青山，五十嵐，北村，小野寺）第3回「L D ・ A D H D 等の心理的疑似体験プログラム」9/9（土）ち

えりあ，25名

- ・北海道心理・教育アセスメント研究会（青山，五十嵐，北村，小野寺）
第4回「事例検討会」12/9（土）サテライト，22名：2/3（土）ちえりあ，39名
- ・北海道心理・教育アセスメント研究会（青山，五十嵐，北村，小野寺）
第5回「事例検討会」2/3（土）ちえりあ，39名
- ・渡島特別支援教育研究会（小野寺）9/24（日）北斗市総合文化センター
80名
講演会「子どもの情動と愛着問題を考える」
シンポジウム「愛着に関わる子どもの行動と幼児教育・学校教育の役割」
- ・北海道学校心理士会研修会（小野寺）11/3（金）かでの2・7 70名
「心理・教育アセスメントを考える～K A B C・IIの理解と活用を通して」
- ・札幌市発達障がい支援研究会（小野寺）1/11（木）北九条小学校 50名
「個別の教育支援計画に期待すること～サポートファイルさっぽろをうまく活用するために～」
- ・附属学校・特別支援学級ネットワーク研修会、広島大学附属東雲小学校・特別支援学級8月9日～8月12日、『北海道教育大学附属札幌小・中学校特別支援学級「ふじのめ学級」について8月10日』（ふじのめ学級：小田有佳里、中禰真介）

4. 教職大学院、学部、附属学校の教員養成における共同的取り組み

(1) 望ましい教員養成の在り方プロジェクト

北海道教育大学・教職大学院・附属小中学校（ふじのめ学級）との連携による「望ましい教員養成の在り方プロジェクト」の取組を実施した。プロジェクト内容は①教員養成学部（学生の教員養成機能）②教職大学院（教育委員会との連携：現職教員の研修機能）③附属学校（実践の場：プラットホームの機能）の検討であった。研究方法は、プロジェクトチームの共同研究として、学部実習指導担当教員（千賀）、ふじのめ学級代表（吉呑特命教頭）、ふじのめ学級教員兼教職大学院院生（山口）、教職大学院教員兼指導教員（小野寺）を中心に以下の要領で研究を進めた。実施目的は、①教職大学院教員が学部実習生に対し

て、授業づくりに向けた「心構え」や「基本のき」をミニレクチャーし、実習に向かう準備を整える（8月22日・水）、②学部実習生を指導する指導教員の授業を参考に、望ましい授業づくりについて研修を深める、③学部実習生の授業をマイクロ・ティーチングの手法を使って分析し、望ましい授業づくりについて研修を深めることであった。

取り組みの成果としては、①従来のガイダンスの中にミニレクチャー（30分）を取り入れたことで、学生の実習に入る心構えがより明確になり、自信をもって取り組もうとする姿勢が見られた。一部の学生からは、「気持ちが楽になり、子供たちに伝えたいと思っている内容について、自信を持って積極的に取り組もうと意欲が湧いた」との意見も聴取された。②今回は、担任（教職大学院生）の学級のみが対象（配属学生3名）となったが、大学教員（担任の指導者）、担任（学部学生の指導者）、授業をした学生が一堂に会して、授業分析や授業後の反省等を実施したことで、学生はもちろんのこと、学生を指導した担任（大学院生）にとっても、学部学生への指導の在り方等について大変勉強になったとゼミの際に報告を受けた。まさに今回の取組は、コンサルテーションとしての効果も表れたのではないかと考えている。

取組の課題としては、今回、北海道胆振東部地震によって、当該学校も実習期間中にやむなく休校せざるを得ない状況となり、当初予定していたマイクロ・ティーチングの授業分析が十分できなかったこと、また、今回は対象学生を1学級3名のみとしたが、今後は可能な限り多くの学生に対しても本取組を実施することが望ましいと考えている。

（2）附属特別支援学校との協働による臨床観察実習

附属特別支援学校との協働により、2年生11名（釧路校）の臨床観察実習（特別支援教育総合研究）を2019年2月に実施した。授業観察から収集されたデータを元に、学生グループでカンファレンスを行い、その中から生じた問題意識等について、附属特別支援学校教員の参加を得たカンファレンスを行うことによって、学生が主体的に「問題」を発見し、問題意識を深める学びにつながった。このような問題発見を含む特別支援教育実習カリキュラムのあり方について、今後さらに研究を深める必要がある。

5. プロジェクトの位置づけと評価

本プロジェクトは、中期計画番号 15) として学部全体として、特別支援教育の学校教育に密着した研究である。その研究成果については、学術的に発信するだけでなく、本学の教員養成教育の充実のために活用するとともに、地域の特別支援教育にかかわる教育課題の解決に応用した。さらに中期計画番号 21) グローバル化への対応として、海外の関係学会や教育現場への情報発信をおこなった。また新たな学びのニーズに関する情報を収集・研究し、その成果をテキスト・教材等として可視化するとともに、多様なメディアを通して、本学全体の研究に関する広報に取り組むなど、上述した通り大きな成果を上げることができた。

Ⅲ・実施計画

特別支援教育にかかわる社会的ニーズへの対応として、本学の中期計画に基づき以下の研究プロジェクトの実施を予定している（一部継続）。

1. ほくとかネットと通した学生、学校現場への情報提供と情報共有の拡大を継続的に実施

2. 教員向け研修プログラムの実施

附属特別支援学校の公開研究協議会において、現在求められる附属特別支援学校の役割について校内で研修を行う予定

3. 附属との連携による人材育成プログラム

附属特別支援学校での臨床実習授業実施

- ・特別支援教育の実習カリキュラム内容についての研究を実施

4. 個別の支援計画作成における実態把握を効果的に行うための心理アセスメントの実装プロジェクト

(1) 質問紙などを用いた評価の実施と普及

SDQ (子どもの強さと困難さアンケート), 子どもの QOL 尺度 (古荘ら, 2014), 社会的スキル (磯辺ら, 2006), 読み書きスクリーニング検査など, 原則標準値があり, 無料で用いることができ, 手軽に実施可能なものを用いる。実施しても, 活用ができなければ意味がないので, 実施した学校を直接訪問し, 活用法などの研修を行う。訪問を実施する他, 活用法については, マニュアル

ル化してネットに公開する。

(2) 個別の支援計画作成における実態把握のための尺度開発

前述した既存の尺度の実施と同時に新たな尺度開発を行う。こうすることで、妥当性の検討も行うことが可能である。加えて、個別の支援計画作成の際の実態把握に用いることができるものを開発することで、よりの確で簡便な実態把握が可能になる。現在ほくтокネット上に公開されているプリアセスメント・チェックリストをブラッシュアップし、簡便でより使い勝手を重視した標準値のあるアセスメントとして、再度開発を行う。完成した尺度は、学会誌に公表するほか、ネットに公開する。読み書きスクリーニング検査については、就学前の幼児も評価可能な簡便なものを開発する。

(3) 専門的な個別検査の研修

WISC-IV や KABC-II のほか、適応行動を評価する Vineland-II 適応行動尺度、感覚プロファイルについての研修を行う。研修内容はレベル別に実施し、学校や各教員のニーズに応じて実施する。

- 1) 検査結果を反映した個別の支援計画の作成の実際に関する研修
- 2) 各検査の実施法に関する研修
- 3) 各検査の解釈とケースの適用に関する研修
- 4) 各検査法の概要に関する研修

Ⅳ．実施成果の公表

【著書】

- 青山真二(編)、北海道教育大学附属特別支援学校著,2019, アセスメントで授業が変わるー特別支援学校・学級で生かす子ども理解と支援のアイディア, 図書文化
- 安井友康(分担執筆)、第8講余暇活動としてのスポーツ、齊藤まゆみ編著、教育としてのアダプテッド体育スポーツ学、大修館書店、32-35、2018
- 片桐正敏(分担執筆)、第7章自閉スペクトラム症のある子どもの自己制御の支援、森口佑介(編著) 自己制御の発達と支援、金子書房、78-96、2018.

【学術論文】

- 片桐正敏, Bayley-III乳幼児発達検査における運動発達評価の実際と支援の方向性, LD研究, 27(2), 2018, 136-138.
- 村山恭朗・伊藤大幸・中島俊思・浜田 恵・片桐正敏・田中善大・高柳伸哉・野田 航・辻井正次, 一般小中学生におけるいじめ経験と養育行動の関連に関する横断的検証, 健康心理学研究,31(1), 2018, 31-41.
- 片桐正敏・蔦森英史・萩原 拓, 自閉症スペクトラム障害および学習障害のある子どもの知的機能と感覚特性, 適応行動の特徴, 臨床発達心理実践研究, 投稿中.
- 小淵隆司・戸田竜也, 「へき地・小規模校における特別な支援を要する児童を包摂する複式学級の柔軟な授業のあり方」, へき地教育研究第72巻, 2017, 39-45.
- 阿部美穂子・中田紗英・松田麻美, へき地小規模校の授業から抽出されるインクルーシブ教育の実現要因. へき地教育研究, 73, 2018, 53-68.
- 阿部美穂子・二宮信一・西田めぐみ・小林麻如, インクルーシブ教育体制における特別な支援ニーズのある子どもの家族支援ーアイスランドにおけるインタビュー調査から見えてきたもの. 釧路論集, 50, 2019, 61-68.
- 大山祐太・新堀京花, 小学生の障害理解を目的としたアダプテッド・スポーツ授業の開発、アダプテッド・スポーツ科学16(1)、2018、7-20.

【学会発表、シンポジウム等】

- ・特別な教育的ニーズに対応する人材育成のための情報支援～北教大特支ブ

- プロジェクトの取り組みと評価～、北海道特別支援教育学会第13回大会(函館)、安井友康・青山眞二・齊藤真善・三浦 哲・千賀 愛・池田千紗・萩原
- ・片桐正敏・蔦森英史・小淵隆司・阿部美穂子・木戸口正宏・二宮信一・戸田竜也・五十嵐靖夫・北村博幸・細谷一博・大山祐太・小野寺基史・附属特別支援学校・附属札幌小中学校特別支援学級、2018/07
- ・特別支援学校における外部専門家としての作業療法支援、第13回北海道特別支援教育学会、池田千紗、中島そのみ、仙石泰仁（2018年7月）
- ・特別支援教育における教師に対する作業療法支援の効果－アンケートを用いた1事例の検討－、第49回北海道作業療法学会、池田千紗、中島そのみ、仙石泰仁（2018年6月）
- ・文章題を苦手とする児のつまずきの解明 -問題解決過程で描いた図による評価-、第49回北海道作業療法学会、諫早悠希、長谷部希晶、中島そのみ、仙石泰仁、池田千紗（2018年6月）
- ・ Factors Affecting Inclusive Physical Activity in Recreation A case study of children with and without disability in the sports club, European Congress of Adapted Physical Activity 2018, Worcester UK, 2018/7, Yasui, Tomoyasu , Senga, Ai , Ikeda, Chisa & Yamamoto, Rihi to
- ・読み書きの躓きは学業成績を予測する，日本特殊教育学会第56回大会，片桐正敏，2018.9.22-24，大阪市．
- ・特別支援学校の教員に求められる専門性は何か，日本特殊教育学会第56回大会，逢坂一伸・片桐正敏，2018.9.22-24，大阪市．
- ・障害理解教育におけるアダプテッド・スポーツの活用に関する研究 - 小中学生の比較検討から - 、大山裕太、日本アダプテッド体育・スポーツ学会第23回大会、2018/12
- ・アダプテッド・スポーツの授業が児童の障害者イメージに与える影響～授業前・授業後・授業4か月後の比較から～、大山裕太、第28回日本障がい者スポーツ学会、2019/2

<シンポジウム>

- ・安田小響・足立匡基・萩原拓・村山恭朗・浜田恵・高橋芳雄，新しい子どもの発達アセスメントツール～子どもの発達の包括アセスメントについて～，日本心理臨床学会第37回大会，2018.8.31，神戸市．

- ・通常学級における特別支援教育の実際Ⅲ～対話的な学びを促す指導の工夫～、日本特殊教育学会第56回大会、青山眞二、太田千佳子、上野 樹、工藤陽介、2018.9.22-24，大阪市

<講習会>

- ・スクリーニングとケースカンファレンス,5/21，山形県長井市長井南中学校，約30名
- ・特別支援教育研修会，6/14，富良野市特別支援連携協議会コーディネーター研修，34名
- ・札幌市特別支援教育コーディネーター養成研修会，6/27，7/4，札幌市，約150名
- ・北海道心理教育アセスメント研究会，7/7，10/20，12/15，2/2,札幌市，約150名
- ・私保連東区保育者研修会，7/26，札幌市，約60名
- ・保育心理士養成講座，8/4，札幌市，20名
- ・北海道学校教育相談研究会，8/7，札幌市，約60名
- ・カウンセリング研修講座（2級），10/16，10/23，札幌市,8名
- ・砂川地域療育推進協議会講演会，10/31，砂川市，50名
- ・豊富町特別支援教育連携協議会講演会，11/2，豊富町，約30名
- ・保育心理士フォローアップ講座，12/1，札幌市，
- ・北海道特別支援学級設置学校長協会後志支部研修会，12/3，余市町，
- ・北見市特別支援教育連携協議会研修会「今、求められる特別支援教育～障がい者の特性に応じた自立活動の実際～」，12/6，北見市，約120名
- ・長沼町立舞鶴小学校特別支援教育研修会，12/10，長沼町
- ・平成30年度地域連携研修「知的障害児教育における主体的・対話的で深い学びの具現化に向けた授業改善」，12/12，東川町，約60名
- ・上市町教育センター研修会「通級指導教室の仕組みと運営の実際」，2/5，富山県上市町，約60名
- ・美唄東小学校教員研修、2018/10、約30名
- ・留萌管内高等学校保健体育科教育研究協議会、2018/10、約15名
- ・空知管内社会教育委員長等研修会、2018/11、約70名
- ・美唄養護学校教員研修、2018/11、約50名
- ・栗山町スポーツ少年団指導者研修、2019/2、10名

- ・長沼町青年学級研修、2019/2、約20名

(5)テキスト、報告書、研修資料等

- ・研究紀要＜第48集＞平成30年度全道教育研究大会（特別支援教育）
（ふじのめ学級）

取り組み担当者

青山 眞二・札幌校・教授
齊藤 真善・札幌校・准教授
池田 千紗・札幌校・准教授
千賀 愛 ・札幌校・准教授
三浦 哲 ・札幌校・教授
安井 友康・札幌校・教授
小野寺基史・教職大学院・教授
萩原 拓 ・旭川校・教授
蔦森 英史・旭川校・准教授
片桐 正敏・旭川校・准教授
二宮 信一・釧路校・教授
小渕 隆司・釧路校・准教授
戸田 竜也・釧路校・准教授
阿部美穂子・釧路校・教授
木戸口正宏・釧路校・講師
五十嵐靖夫・函館校・教授
北村 博幸・函館校・教授
細谷 一博・函館校・准教授
大山 祐太・岩見沢校・准教授
太田千佳子・附属特別支援学校・副校長
ほか附属特別支援学校教員
吉呑 正美・附属札幌小中学校特別支援学級・特命教頭
ほか附属札幌小・中学校 特別支援学級（ふじのめ学級）教員

平成 30 年度学長戦略経費（重点分野研究プロジェクト）
特別な教育的ニーズに対応する人材育成のための情報支援
—支援教材の作成と ICT を活用した情報提供—
事業成果報告書
北海道教育大学特別支援教育プロジェクト報告
北海道教育大学特別支援教育プロジェクト事務局
北海道教育大学札幌校特別支援教育（安井研究室）
〒002-8502 札幌市北区あいの里5条3丁目
電話/fax 011-778-0433
発行 平成 31年 3月 31日